近世史サマーフォーラム2009の記録

前近代の外交と国家

ー国家の役割を考えるー

平　川　新

近世史サマーフォーラム2009実行委員会
2010年3月刊

前近代の外交と国家

―国家の役割を考える―

平川新

はじめに

(1)問題関心について

この報告で「前近代の外交と国家」というテーマを掲げたのは、二〇〇八年に小学館から出版した『開国への道』(小学館、二〇〇八年)という本の一章として、「『帝国』としての近世日本」を書いたことが前提にあります。同書では戦国時代後期から江戸時代初頭の時期に、日本を「帝国」とみなし、豊臣秀吉や徳川家康を「皇帝」と呼ぶ言説が西洋人の間に広く形成されていた、ということを指摘しました。そこで本報告では、そもそもこうした認識はなぜ形成されたのか、また西洋列強の日本認識というのはどういうものであったのかについて、少し掘り下げてみたいと考えた次第です。

この時期の世界史的な動向との関連では、ポルトガルやスペイン、あるいはオランダやイギリスなどの西洋列強が世界を植民地化していく動向に対して、なぜ日本は植民地化を免れたのかという問題があると思います。このことと、西洋列強が日本を「帝国」とみなした問題はどのように絡んでいるのだろうか。またこの時期は、秀吉の朝鮮出兵や、いわゆる「鎖国」化の問題もありますが、これらは「帝国」認識や日本認識とどう絡んでいるのだろうか。あるいは逆に日本の西洋やアジアに対する認識はどのようなものであったのだろうか、ということも気になっております。

このような問題関心をもったとはいえ、この時期についてはこれまでに膨大な研究があります。独自に史料を発掘してくるということも、なかなか難しいことです。そこで、研究史に学びながら、これまでに紹介されている史料などを再整理するなかで、右の問題にアプローチし、少しでも新味を出せるような再解釈ができればと考えております。

(2)この時期の対外関係史研究について

この時期の対外関係史研究でもっとも中心的に検討されてきたのは貿易論だと思いますが、岩生成一さんをはじめとして多くの研究蓄積があります。朱印船貿易から奉書船貿易へ、さらに貿易制限令が禁教令と組み合わされて「鎖国」あるいは「海禁」へ、という道筋が具体的に明らかにされてきました。そのなかで加藤栄一さんが、「ヨーロッパ勢力の東アジア世界への進出によって、日本は対外関係の新たな定置を迫られた」(『幕藩制国家の形成と外国貿易』校倉書房、一九九三年)と述べているように、ヨーロッパ世界との邂逅が日本の対外関係を大きく変容させるものでした。長崎・対馬・薩摩・松前を対外的窓口とする、いわゆる「四つの口」論は、オランダ・中国・朝鮮・琉球・アイヌとの関係をまさしく再定置したものでした。

しかしこの再定置は貿易関係だけではなく、キリスト教の排除を伴うものでした。水本邦彦さんは近著の『徳川の国家デザイン』(小学館、二〇〇八年)で、西洋との対峙のなかで日本が非キリ

スト教国家として確立していく過程を描いていますが、禁教令をどう評価するかという点では、これまでにもさまざま見解が出されてきました。手近なものから特徴的な発言だけを少しあげてみますが、たとえば清水紘一さんは『キリシタン禁制史』（教育社歴史新書、一九八一年）のなかで、「キリシタン禁制は結局近世日本に、視野の狭い排他的な島国的気質をもたらす一因となった」と指摘されています。

また、若桑みどりさんの『クアトロ・ラガッツィ―天正少年使節と世界帝国』（集英社、二〇〇三年）では、「スペイン・ポルトガルには日本を征服する国力も意志もなかったにもかかわらず、国民の愛国心に訴えて仮想の外敵を作り上げ、国民の心をひとつに引き絞った。そのときキリシタンは二重の意味で血の制裁を受けなければならなかった」と記されています。さらに、「日本は世界に背を向けて国を閉鎖し、個人の尊厳と思想の自由、そして信条の自由を戦いとった西欧近代世界に致命的な遅れをとったからである。ジュリアンを閉じ込めた死の穴は、信条の自由の棺であった」という指摘もされています。ジュリアンというのは天正遣欧使節の一員だった中浦ジュリアンのことです。

いずれも禁教と鎖国を関連づけた文明論的評価だと思いますが、正直なところ、こういう評論にどれほどの根拠があるのだろうかと思わざるをえません。たとえば、日本は島国的で排他的になったというのですが、何をもってそういわれるのか、根拠がわかりません。ではヨーロッパは視野が広く融和的だったということなのでしょうか。こうした反問にあまり意味がないように、そもそもの日本評価にも印象批評以上の意味がないように思われます。キリスト教を排除したからというのであれば、あとで述べますようにキリスト教勢力は非キリスト教的宗教に対して、より排他的で暴力的でした。

若桑さんに対しても、スペイン・ポルトガルには日本を征服する意志はなかったと本気で考えておられるのか、と思ってしまいます。若桑さんもご存じのはずの研究史を顧みれば、とてもそういうことにはならないのではないでしょうか。またキリスト教の布教を否定したことは事実ですが、それが「信条の自由の棺」だったと決めつけられると、ではヨーロッパではどうだったのでしょうかとお尋ねしたくなります。魔女狩りをして世俗の信仰を否定し、非キリスト教世界の宗教を否定して植民地化を推し進めてきた当時のキリスト教世界に、はたして「信条の自由」＝信仰の自由はあったのでしょうか。日本でもキリシタンによって寺社がかなり破壊された、ということが研究史では明らかにされています。廃仏毀釈は明治維新のことだと考えられていますが、実は日本における最初の廃仏毀釈はキリシタンがおこなっていたということになります。信仰の自由を論じるときに、こうしたことは視野に入れてなくてよいのでしょうか。

キリスト教世界にとってはキリスト教こそが唯一至高の宗教であるがゆえに、バチカンや宣教師たちはそれを非キリスト教世界に「強制する自由」をもっていると考えていたようです。それが彼らにとっての「信条の自由」だったのだと思います。しかしそれを規制すると「信条の自由」が否定されたと論断するのは、キリスト教徒ならばともかく、研究者の評価としては著しくバランスを欠いているように思われます。

このような鎖国体制と関連づけた、閉鎖的体質論、あるいは日本の非文明性や信仰の自由を否定したとする国家的性格の強調は、ここで紹介した研究者だけではなく、結構多くの方々がなにかにつけ言及しておられたように思います。しかし、それらはかなり印象批評的であって、必ずしも実証的でも論理的でもないようにみえます。とはいえこうした言説は、あまり疑われることなく人口に膾炙してきたのではないでしょうか。

その点で注目しておきたいのは、朝尾直弘さんの次の指摘です。「カトリックへの教化は伝統的文化との闘争であり、それの圧伏なくしてはありえないであろう。ここに、宗教と文化の民族的形態の存立をかけた闘争の生じる原因があった。闘争の性格がこのようであれば、教化は軍事的征服をともなわざるをえない」と述べています（『鎖国』小学館、一九七五年）。朝尾さんは、キリスト教の布教あるいはその受容は決して「信仰の自由」が拡大したものではなく、軍事的な「征服」と表裏一体であること、すなわち固有の民族的な信仰や文化の否定であったということを指摘しておられました。文明の衝突を考えるにあたっては、こうした視点を忘れるべきではないと私も思っております。

キリスト教史研究者の高瀬弘一郎さんも、同様の指摘をしておられました。高瀬さんは『キリシタン時代の研究』（岩波書店、一九七七年）のなかで、イベリア両国（ポルトガルとスペイン）による中国・日本侵略計画の存在を非常に丁寧に、かつ多くの史料を引用して紹介しています。そして、「現実にスペイン、ポルトガル両国によって我が国に対する武力征服が行われる可能性の有無にかかわらず、このような当時の布教事業の本質的性格を等閑に付して、江戸幕府の対切支丹政策を単に信仰や思想に対する不当な弾圧とのみみるのは、必ずしも充分とは言えないのではないであろうか」と述べています。ここでも日本における禁教の問題を信仰の自由の否定としてとらえる傾向に対して注意を喚起しておられました。

ところで、この時期の対外関係史で抜きにできないのが豊臣秀吉による朝鮮出兵です。この研究でのもっとも大きな特徴は、侵略の歴史的責任あるいは歴史的反省という視点が強調されているということかもしれません。たとえば北島万治さんの『豊臣秀吉の朝鮮侵略』（吉川弘文館、一九九五年）では、「唐・南蛮まで征服しようとした専制君主秀吉の大義なき戦い」と記されています。曽根勇二さんもまた、徳川政権が創出した「鎖国体制」は朝鮮侵略戦争に関する「民族的な総括を不問」に付したと述べています（『歴史評論』二〇〇七年一二月号、書評／中野等『秀吉の軍令と大陸侵攻』）。

朝鮮出兵が朝鮮や中国との具体的な確執から生み出されたものではなく、日本の側の独断によることはその通りだと思います。ではなぜ秀吉がそうした行動を起こしたのかについては、秀吉の狂気論や誇大妄想論はともかく、統一政権の成立にともなう国内矛盾の国外への転嫁、つまり国内的契機論を中心に検討されてきたように思います。それを総括する論になるのが、藤木久志さんの「惣無事体制」の国外への延長論ではないでしょうか（『豊臣平和令と戦国社会』東京大学出版会、一九八五年）。

ただこういった論考を拝見していて、どこまで説明しきれているのだろうかというのが、現在私が抱いている印象です。なぜ秀

吉の征服構想が、中国・朝鮮だけではなく、琉球・台湾・ルソンを含めた東アジア全域にまで広がったのか。それを国内的要因だけで説明できるのだろうか、と。こうした秀吉の東アジア認識は、ポルトガル人やスペイン人がもたらした情報に拠るところが大きいのではないか。そうした意味では、秀吉の西洋列強認識との関係を検討すべきではないだろうか、と考えている次第です。

まだ十分に研究史を把握しきれていない状況ですので見落としや誤解があることを恐れていますが、先学のお仕事に学びながらこの時期の対外関係を私なりに再整理し、そこから国家というものが果たした役割について、少しばかりの見通しを得たいと考えております。

一　ヨーロッパ列強とアジア・日本

「ヨーロッパ列強とアジア・日本」ということで話しを進めていきます。この議論の大前提となるのは、一四九四年、スペインとポルトガル両国によるトルデシリャス条約が締結されて、デマルカシオン（世界領土分割）体制が確立することです。このとき、西アフリカセネガル沖のカーボベルデ諸島の西の子午線（西経四六度三七分）を基準に、その東側の新領土はポルトガル領、西側はスペイン領とすることを決定します。つまり、両国によって、世界を二つに分けましょうということになるわけです。ただし、一五八〇年には、スペイン国王がポルトガル国王を兼ねるということで、スペインがポルトガルを併合します。国としては別々ですが、これ以降、スペインが非常に大きな要素となってきます。

日本との関係は、一五四三年のポルトガル人の種子島来着や、一五四九年のイエズス会士フランシスコ・ザビエルの鹿児島上陸などで知られていますが、一五五〇年代にはマカオを拠点に対日交易を展開していたことが明らかにされています。マニラのスペイン船も一五八四年には平戸に来航し、交易が始まります。

これに対してオランダは、一五六八年以降、宗主国スペインからの独立戦争を展開し、一六四八年のウェストファリア条約で独立が承認されるまで続きます。この間、アジアに侵出してジャカルタに拠点を築き、東南アジア貿易でスペインやポルトガルと勢力を争いますが、慶長五年（一六〇〇）にリーフデ号が豊後臼杵湾に来着して以降、日本との関係が深まり、同一〇年には徳川家康がオランダ国王に正式に通商を求めるにいたります。その後同一四年、平戸にオランダ商館が開設されるのはよく知られています。

イギリスとの関係は、豊後に来着したオランダ船リーフデ号に乗り組んでいたイギリス人ウィリアム・アダムスから開かれます。日本との通商をアダムスに勧められたイギリス国王が家康に親書を届けたのは慶長一八年のことでした。

（1）ポルトガルとスペインの主な中国征服論

高瀬弘一郎さんは前掲の『キリシタン時代の研究』において、ポルトガル人やスペイン人が語ったアジア「征服論」に関する多数の書簡を紹介しておられます。史料集としても価値の高い論文だと思います。最近ではこのお仕事自体が歴史研究者をはじめ一般にもあまり知られていないようですので、これに拠りながら、

まずは中国征服論についてみていきましょう。

高瀬さんが紹介された征服論の数々を私なりに分類して、これらを即時征服論と時宜征服論とに分けてみました。即時征服論というのは即時の征服行動を主張したもの、時宜征服論は即時にではないが状況をみながら適切な時期に征服行動をおこすという意見のことです。

最初に即時征服論ですが、スペインのフィリピン総督フランシシコ・デ・サンデは一五七六年にスペイン国王に対して、鉄・生糸等の貿易を確保するために中国へ軍隊を派遣しなければならないと上申しています（高瀬著七七頁）。貿易品を確保するための軍隊派遣ですから、これほど露骨な軍事制圧論はありません。スペイン国王は翌年の返書で、いまは適切な時期ではないとしていますが、もし友好政策を改める必要があるときは然るべき措置を命じるとしています。これは時宜征服論にあたるでしょう。フィリピン総督は一五八〇年（同七八頁）と八三年（同九〇頁）にも中国征服論を国王に上申していますので、これが植民地為政者の現場感覚だったのかもしれません。とくに八三年のディエゴ・ロンキーリョ総督の書翰では、中国の為政者が宣教を妨害しているので征服行動を起こすことは正当であるとして、国王に迅速に遠征隊を派遣することを求めています。しかも、わずか八千人のスペイン兵と一〇隻ないし一二隻のガレオン船で簡単に中国を征服できるとまで豪語しています。

こうした認識は宣教師たちも同様に抱いていたようです。一五八三年にマニラ司教フライ・ドミンゴ・デ・サラサールはスペイン国王に対して、中国が布教を妨害していることは武装攻撃を正当化するとして、わずかな鉄砲隊で何百万人もの野蛮人（中国人）を殺すことができるので、できるだけ迅速に軍勢を派遣するよう要請しています（同八四頁）。

こうした露骨な即時征服論に対して、もう少し適切な時期を待とうという意見もありました。たとえば一五八二年にマカオの宣教師アルメイダがフィリピン総督に送った書翰では、広東を占領するだけなら二百人の兵隊で十分だが、中国全土を征服するためには、まずは布教に取り組み、そのうえで一万ないし一万二千人の軍勢を送り込めばよいと述べています（同七九頁）。硬軟両様取り混ぜての征服論です。イエズス会東インド巡察使ヴァリニャーノ（在マカオ）も同年、フィリピン総督に宛てて、中国を武力で征服することは大きな益をもたらすが、危険もあるために情報をよく分析し時期を選ばなければならないと述べています（同八一頁）。

一五八四年にイエズス会のアロンソ・サンチェスがマカオから同会日本準管区長カスパリ・コエリョに宛てた書翰では、中国人を改宗させることは不可能なので、メキシコやペルーと同じように征服すべきだと書き送っています（同九九頁）。マカオのサン・パウロ・コレジオ院長フランシスコ・カブラルからスペイン国王への書翰でも相当に露骨なことが述べられています（同九一頁）。今の中国は宣教師の入国も貿易も認めているので征服事業を正当化することはできないが、貿易を口実にマカオへの移住民を増やせば広東の役人は関税収入を増やすために何らかの不法を働くだろう。これは戦争を行う理由となる。陛下が征服事業を決定すればそれを正当化する口実には事欠かない、と。布教が妨害

されればそれを口実とし、布教を容認しているのであれば別な理由を簡単に探し出すというのですから、征服にかけるこの強欲さはなにをかいわんやでしょう。これが聖なる福音を唱える者たちの考えていることでした。

高瀬さんのお仕事をみますと、もっと過激かつ露骨に中国侵略を論じているフィリピン総督や宣教師たちの姿を確認できますが、前出したヴァリニャーノが一五八二年にフィリピン総督に書いた手紙には、「私は多くの人がそれ（中国征服）について語り、いろいろ多くの計画を立てているのを耳にしている」とあります（同八二頁）。つまり宣教師たちの世界では、即時征服論か時宜征服論かの違いはあるとしても、中国征服についてほとんど違和感なく意見交換がなされていたことを、この書翰は証明していることになります。それは前に申し上げた「デマルカシオン」（世界領土分割）体制のなかでの議論ですから、彼らにとっては当然の論理だったということなのでしょう。

（2）ポルトガルとスペインの主な日本征服論

一方、日本についてはどのような話しがなされていたのでしょうか。一五八五年にイエズス会日本準管区長カスパリ・コエリョがイエズス会布教長アントニオ・セデーニョに出した書翰には次のようにあります（高瀬著一〇一頁）。日本に早急に兵隊・弾薬・大砲、数隻のフラガータ船を派遣してほしい。キリスト教徒の大名を支援し、服従しようとしない敵に脅威を与えるためである。これで諸侯たちの改宗が進むだろう、と。松田毅一氏によれば、これより少し前の一五八〇年頃、巡察師ヴァリニャーノは龍造寺隆信と対立していた有馬晴信を軍事的に支援し、これに感謝して有馬はキリスト教に改宗したということです（『豊臣秀吉と南蛮人』朝文社、一九九二年、一九六頁）。コエリョはフィリピンからの軍隊派遣を得て、これをもっと大規模に実行したかったのでしょう。

ただ、ヴァリニャーノがフィリピン総督に宛てた一五八二年の書翰によると、日本の国民は非常に勇敢で、しかも絶えず軍事訓練をつんでいるので征服は困難だ、とあります（高瀬著八三頁）。戦国大名間の実際の戦争状態を目の当たりにして、その戦闘力の高さを認識したためでしょうか。日本征服については慎重にすすめなければならない、と警告しています。その点では積極的な攻勢をかけることを望んだコエリョとの差はありますが、両者に共通しているのは、中国と日本との関係です。

コエリョは先にあげたセデーニョ宛ての書翰で、もしスペイン国王が軍隊を出して日本六六カ国すべてが改宗すれば、好戦的で怜悧な日本の兵隊を得ていっそう容易に中国を征服することができるであろう、と述べています（同一〇一頁）。ヴァリニャーノもまた右の書翰で、中国でスペイン国王がおこないたいと思っていることのため、すなわち中国征服のために日本を重視する必要がある、と書き送っています。

こうした意見はその後も出続けます。一五八三年までイエズス会日本布教長を務めたサン・パウロ・コレジオ院長のフランシスコ・カブラルが一五八四年にスペイン国王に宛てた書翰には次にようにあります。中国を征服するために、日本に駐在しているイエズス会のパードレ（神父）たちが容易に二～三千人の日本人キリ

スト教徒を送ることができる。彼らはうち続く戦争に従軍しているので、陸、海の戦闘に大変勇敢な兵隊であり、少しの給料で喜んで馳せ参じるだろう、と（同九一頁）。また、アウグスチノ会士のフライ・フランシスコ・マンリーケによる一五八八年のスペイン国王宛書翰では、もし陛下が戦争によって中国に攻め入り、そこを占領するつもりなら、陛下に味方するよう日本において王たちに働きかけるべきである、キリスト教徒の王は四人にすぎないが、一〇万以上の兵が赴くことができ、彼らがわが軍を指揮すればシナを占領することは容易であろう、と述べられていました（同一〇三頁）。

先に紹介した中国征服論では、マニラはもちろんですが、インドやメキシコからの派兵が論じられていました。しかしここでは、中国を征服するためには日本からの軍事動員が効果的であることが異口同音に述べられています。まずは日本での改宗を実現し、神の名のもとに日本兵を中国侵略に駆り出す構想だということになります。一五八〇年代はキリスト教徒が増大していた時期ですので、日本支配の実現を楽観視していたのかもしれません。この論に従えば、布教は領土獲得と一体化していたことがはっきりしていますし、日本征服は中国征服の前段としての位置づけだったということにもなります。

高瀬さんが紹介されたこれらの史料は、ある意味ではびっくりするような話しがてんこ盛りということになります。しかし、このような事実がどこまで歴史研究のなかで活かされてきているのだろうかと思わざるをえません。

二　豊臣秀吉によるバテレン追放令とイエズス会

天正一五年六月一九日（一五八七年七月二四日）にバテレン追放令が出されます。その経緯については、高瀬弘一郎さんの『キリシタン時代の研究』や松田毅一さんの『豊臣秀吉と南蛮人』、あるいは最近、山本博文さんが書かれた『天下人の一級史料―秀吉文書の真実―』（柏書房、二〇〇九年）などで検討されています。それぞれがどのような説明をしておられるのか、いくつかを紹介しておきましょう。

たとえば高瀬さんは、イエズス会日本準管区長コエリョによる「怪率な振る舞い」が引き金になったというヴァリニャーノの言葉を紹介しています。これは九州平定のために博多に在陣していた秀吉に、いかにも自慢げに巨大なフスタ船（軍船）を見せたことや、秀吉が中国征服構想を話したときに、コエリョが二隻のポルトガル船の提供やポルトガル領インド副王への援軍依頼を約束したことなどを指しています（高瀬著一〇八頁以下）。こうした行為が、イエズス会が有する軍事力への強い懸念を引き起こしたというわけです。

一方、山本さんは、やはり同じ博多で比叡山の僧徳運が秀吉に、キリシタン大名が司祭へ服従していることや領内の神社仏閣の破壊を命じたり、領民・家臣に改宗を強制したことなどを告げたことが大きな原因だとする、ルイス・フロイスのイエズス会総長宛の書翰を紹介しておられます（山本著第二章）。こうした事例をみると、コエリョの巨大な軍船を見て危機意識をもった秀吉が徳

運の話を聞いてバテレン追放を一気に決断した、と考えることができるかもしれません。

松田毅一さんは、一五九三年にイタリア人マルコ・アントーニオがフィリピン総督におこなったおもしろい証言を紹介しています（松田著一九五頁）。彼は二年間日本に滞在したということですが、「関白はキリスト教や信徒を嫌悪しているのではなく、彼らは自ら望む宗教に従ってよいと公言していた」というのです。つまり秀吉は信仰の自由を保障していたということです。しかし、宣教師たちが大砲を備えて武装したフスタ船をもち、数多くの領地や権力を有していること、彼らが強大になることには強い「敵意」と「憎悪」を抱いていたと述べています。アントーニオは、イエズス会巡察使ヴァリニャーノが龍造寺氏と対立する有馬晴信を、武装したフスタ船を出して援助したことも秀吉の疑心をかったと証言しています。

またしばらくのちの一六〇七年のことですが、オルガンチーノが長崎からイエズス会総長宛に宛てた書翰には次のようにありました（高瀬著一一六頁）。

「二〇年ほど前に太閤がわれわれに日本退去を命じた時も、われわれの敵が、イエズス会士は当地に要塞を築き、ルソンからスペインの援軍を呼び寄せて日本全土の支配者に反抗しようとしていると言って我々を非難したからにほかならない、このような中傷のために、イエズス会は日本で有するものすべてを失ってしまった。」

文中にある「われわれの敵」とは僧侶のことだと思いますが、ここで注意しておきたいのは、秀吉がバテレン追放令を発した理由について宣教師たちが明確に、イエズス会に領土侵略の野心があると秀吉が考えたからだ、と受けとめている点です。同時代における当事者の認識として重視されるべきだと思います。とはいえ先のアントーニオの証言が示すように、秀吉の狙いはあくまで軍事力と政治権力を有する宣教師の追放であって、キリスト教信仰を否定したものではありませんでした。そのことは早くから指摘されていたと思うのですが、秀吉がキリスト教を禁止したという理解が広まっているようにもみえます。山本博文さんが改めて前出の著書で、秀吉は下々の者がキリスト教徒になることは構わないとしていたことを確認しておられますので（山本著一八一頁）、こうした理解をもう少し共通のものにする必要があるようにも思われます。

なお、秀吉が二〇日以内に国外に退去せよと命じたにもかかわらず、多くの宣教師はその後も日本に居残り続けていますので、それほど厳しく取り締まったようにはみえません。バテレン追放令は宣教師たちに、あまり増長するなと警告する意味合いが強かったというべきかもしれません。

このようにみてきますと、布教と一体化した軍事的脅威や、神社・仏閣を破壊して、それこそ信仰の自由を否定する宣教師やキリシタン大名の動きに対して、秀吉が強い危機感を抱いたからこそバテレン追放令が発されたといういうことになります。それはやがて禁教令へと展開していくことになるのですが、なぜキリスト教信仰の排除につながっていくのかということについては、こうした経緯をみるだけでも、やはり相当に宣教師やスペイン・ポルトガル側に問題があったといわざるをえないと思います。それ

は、のちにみるように家康段階でも同様でした。

秀吉のバテレン追放令に対してイエズス会側は、当然のことですが強く反発します。とくに日本準管区長カスパリ・コエリョの動きに注目しておきましょう。一五九〇年一〇月一四日付けのヴァリニャーノからイエズス会総会長宛に出された書簡（高瀬前掲著一〇八頁以下）によると、コエリョは有馬晴信や小西行長などのキリシタン大名に反秀吉連合の形成を呼びかけた、とあります。武器・弾薬の提供を申し出たそうです。しかしキリシタン大名らはみな、これを拒否しています。

一方でコエリョは、フィリピンの総督や司教などに対して援軍派遣を要請しています。二、三百人のスペイン兵が来れば要塞を築いて秀吉から教界を守ることができると書き送ったのですが、フィリピン側はこれに応じておりません。もし派兵していれば秀吉をさらに怒らせ、マニラとの全面戦争に突入し、日本のキリスト教界も全滅させられることになるでしょうから、とても応じることができなかったわけです。賢明な選択だったといえます。

とはいえ、この軍事支援要請はコエリョだけの考えではありませんでした。オルガンティーノなど七人のパードレが参加した協議会で決定されたものであり、そのなかには日本のよき理解者とされてきたルイス・フロイスも入っていたそうです（高瀬著一一九頁）。

ところで、以上紹介してきたように高瀬弘一郎さんのお仕事はとても大きな意義をもっているのですが、これに対して若桑みどりさんは、「宣教師は最初から背後にポルトガルの軍隊を背負って日本を侵略しようとしていたのだということを考える歴史家が出てくるのは、しかたのないことかもしれない」（若桑前掲著第六章）と述べています。これはポルトガルやスペインによる布教と侵略の一体化戦略を指摘する高瀬さんへの批判なのですが、こうした見方が前提にあるからこそ冒頭に紹介したような、「スペイン・ポルトガルには日本を征服する国力も意志もなかったにもかかわらず」と、あたかも日本の側が一方的に彼らを排除したとでもいうような若桑さんの言葉が出されてくるのだと思います。

若桑さんの『クワトロ・ラガッツィ』は天正少年使節の時代状況を描いた、とても魅力的な歴史書なのですが、この征服論に関しては高瀬さんのお仕事のほうに私は説得力を感じています。若桑さんは、宣教師全員が侵略的ではなく平和主義的な宣教師もいたといわれます。しかし彼らの論理は平和主義なのではなく、前に紹介しましたように時宜征服論でした。いまは適切ではない、といっているにすぎません。宣教師たちにとって、デマルカシオン（世界領土分割体制）は、議論の余地のない自明の前提だったということを再認識すべきだろうと思います。

私たちは歴史の結果を知っていますので、秀吉や徳川政権は過剰反応だったなどということができる立場にいます。しかしその時代の当事者にとって、世界中を武力的に支配しているポルトガルやスペインの姿を知ったときに、その勢いで日本に迫ってくるかもしれないと受けとめるのは当然だと思います。その同時代感覚を大事にするかどうかにも、解釈の差があらわれてくるのではないかと思っております。

三　豊臣秀吉の東アジア征服構想とスペイン勢力の動向

(1)明・朝鮮征服計画とイエズス会

豊臣秀吉の東アジア征服構想とイエズス会やスペイン勢力の関係について、整理しておきたいと思います。

まず、秀吉による明・朝鮮征服計画です。一五八六年三月にイエズス会準管区長であるコエリョは大坂で秀吉に拝謁しています。その会見の様子を報じたオルガンチーノは、コエリョが秀吉に九州への出陣を要請し、その時には九州のキリシタン大名をすべて秀吉側に立たせるよう尽力をすることを述べたということです。それだけではありません。秀吉が中国への出征をほのめかしたので、コエリョはポルトガル船二隻の提供を申し出たそうです。

ところが、オルガンチーノと共にこの会見に同席したフロイスの書き方は、これと少し異なっています。フロイスによると、秀吉のほうからコエリョに大船二隻と優秀な航海士を求めたとなっています。これを紹介した松田毅一さんは「いずれが真なりや」と書いておられます(『南蛮のバテレン』朝文社、一九九三年、一三二頁)。

軍艦二隻の提供をどちらが先に言ったかは気になるところですが、実際の朝鮮出兵の六年も前のことです。随分早くから征服計画を練っていたようですが、さらに大きな問題は、両者が軍艦二隻の提供で合意していたとすれば、中国征服は日本とポルトガル(スペイン)の同盟によって実施されることになるという点です。

先ほど紹介しましたようにコエリョは、一五八五年のイエズス会布教長セデーニョ宛ての書翰で、スペイン国王が日本に軍隊を派遣して改宗が実現すれば、日本の兵隊によって容易に中国を征服することができると書いていました。軍艦二隻が話題になった秀吉との会見はその翌年のことですから、コエリョは容教的な秀吉を巧みに利用してスペイン(ポルトガル)・日本同盟による中国征服を実現しようと考えたのかもしれません。

しかしこの軍艦二隻問題でもう一つ注意しておきたいのは、イエズス会(ポルトガル)がもつ軍事力の大きさを秀吉が認識したであろうという点です。この会見のあと、九州に出兵し博多に在陣した秀吉にコエリョは大型のフスタ船を見せました。秀吉は立派な軍船だと感嘆したということですが、当然のことながらイエズス会に対する警戒心を膨らませていったわけです。

バテレン追放令が出されたあとの一五九〇年にヴァリニャーノがイエズス会総会長に宛てた書翰でも、前に少し紹介しましたように、この経緯が報告されています(高瀬著一〇八頁)。しかしこの書翰にはもう一つ、秀吉の警戒心をさらに増幅させたに違いない事柄が記されています。それはコエリョが二隻の軍船だけではなく、中国出兵の際にはポルトガル領インド副王に要請して援軍を送らせようと語った、とあることです(同一〇九頁)。

こうしたコエリョの発言を聞けば、ポルトガルの軍船は日本にまでやってくることが可能なのだ、と受けとめるのは当然のことではないでしょうか。後世の歴史家は、ポルトガルやスペインの軍船が日本に遠征する可能性は低かったと考えがちのようですが、こうしたやりとりを見ますと、当事者としては現実性を帯びたものだったと思います。あとで触れますが、そうした認識があ

るゆえに秀吉は天正一九年（一五九一）、インド副王に対して明征服計画と布教禁止を通告する警告文を出したのではないかと考えております。

ほかの宣教師たちやキリシタン大名たちは、コエリョが秀吉に対してとても危険なことをしていると忠告したそうですが、その心配の通り、秀吉はその翌年にバテレン追放令を出したわけです。

これまでも指摘されていますように、ポルトガル・スペイン勢力の軍事力に対する警戒心がバテレン追放令につながったのだと思います。しかし私が思うにその軍事的脅威は、たんにバテレン追放令だけではなく、次に述べるように、秀吉の東アジア征服構想にも大きくつながっていったのではないかと考えております。

（2）フィリピンへの服属要求とマニラの恐怖

秀吉が朝鮮出兵のために肥前国名護屋に築城を命じたのは天正一九年（一五九一）八月ですが、原田孫七郎に託してフィリピン総督に書簡を送り服従を要求したのは、その翌月のことでした（『異国往復書簡集』二九頁）。その一節には、「これ旗を倒して予に服従すべき時なり。もし服従すること遅延せば、予は速やかに罰を加ふべし。後悔することなかれ」とあります。秀吉からのこうした要求に対して、フィリピン総督は慌ててマニラに戒厳令を布き、スペイン国王にメキシコからの援軍派遣を要請するなど、非常事態を宣言しています（松田毅一『豊臣秀吉と南蛮人』一四二頁）。ただしこのような対抗的な動きと併行して、緊張状態を回避するためにフィリピン総督は一五九二年、秀吉に返書を出しています。そこには、秀吉の書翰を持参した原田孫七郎なる人物の格が低いので、本当に秀吉からの書翰であるのか偽書であるのか判断しかねる、なお日本との親交を希望する、とありました（『異国往復書簡集』三四頁）。秀吉の攻撃に備えてマニラは臨戦態勢をとったわけですが、総督から秀吉へ友好のメッセージを送ることも外交的措置としてやっていました。

このあと天正二〇年七月と文禄二年（一五九三）一一月、秀吉はさらにフィリピンに追い討ちをかけます。文禄二年のフィリピン総督宛ての書簡では、「多数の武将がマニラ占領を予に求めている」ことや、自分たちが「支那に赴けば呂宋は甚だ近く、予が拇指の下にあり」といったような脅しをかける一方、「貴下が速やかに人を遣わしたるは賢明なることにして、予はこれを大に喜ぶ」と述べています（同五九頁）。

朝鮮やフィリピンに対するこうした動きと併行して秀吉は、天正一九年（一五九一）七月、ポルトガル領インド副王に、明征服計画を必ず成しとげるという話しと、日本での布教禁止を告げます（『異国往復書簡集』二六頁。松田毅一氏によれば、この書翰が出されたのは翌年とのこと。『豊臣秀吉と南蛮人』一一四頁）。そのうえで貿易のために来航することを求めていますが、朝尾直弘さんは「入貢を促した」というような解釈をしておられます（朝尾前掲著九二頁）。原文には「入貢を促す」というような文言はありませんが、確かにそうしたニュアンスが感じられる文章ではあります。

しかし私がここで注意しておきたいのは、なぜ明征服計画や布教禁止をインド副王に伝えたのかという点にあります。おそらくここがポルトガルのアジア拠点だという認識があったからではな

いでしょうか。これまでみてきたようにポルトガルの世界戦略は布教と貿易と征服の一体的推進ですから、秀吉がインド副王に対して、布教を禁止し貿易のためのみの来航を求めたのは、事実上この世界戦略を否定したことになります。明をも攻め取る勢いの日本にはポルトガルが進める世界植民地戦略は通用しないぞ、という警告の意味合いがあったという解釈も可能だと思います。

文禄二年一一月、フィリピンへの使者派遣と相前後して、秀吉は高山国（台湾）に書簡を送り、日本への服属を求めました（『異国往復書簡集』三四頁）。ただ、台湾にはまだ国家が成立しておりませんので、手渡すべき対象を特定できずに戻ってきたそうです。この書簡には「南蛮、琉球も年々入貢し」とありますが、ここにいう「南蛮」は先ほど紹介したフィリピン総督が秀吉に使者を派遣したことを指しているのではないかと思います。友好を求める使者も、秀吉にとっては入貢に等しいものだったようです。

なお台湾について付け加えておきますと、一五九六年にフィリピン総督ダスマリーニャスは台湾島の征服を計画しています（ファン・ヒル『イダルゴとサムライ』法政大学出版局、二〇〇〇年、四九頁）。これは実現しませんでしたが、一六二二年、オランダ東インド会社が台湾海峡の澎湖を占拠します。そのため一六二四年に明軍と交戦しますが、和議によってオランダ人は台湾に移りました。ところが一六二六年、今度はスペイン人が台湾北部を占拠して分有状態になっています。オランダは一六四二年、艦隊を派遣してスペイン勢力を台湾から駆逐し、台湾はオランダの植民地に組み込まれます。しかし一六六二年には鄭成功の攻撃を受けてオランダは台湾から撤退せざるをえなくなりました。

こうした熾烈な領土争奪戦が日本の近隣で展開していたわけです。この時期の国際関係や秀吉・徳川政権の反応をみるときには、こうした動きも視野に入れておく必要があるのではないかと思います。

ところで秀吉の攻勢をうけたフィリピン＝スペイン側は、日本に対して相当強い恐怖感を抱いています。一五九五年二月一〇日、フライ・ヘロニモ・デ・ヘスースから、マニラの王立会計院収税吏兼監査官フランシスコ・デ・ラス・ミサス宛に送られた書簡（ファン・ヒル前掲著四四頁）では、「マニラでは常に人員を整え、大きな城壁を備えておくことがきわめて重要」と述べられています。マニラ征服を求めている「薩摩の者」＝島津氏に秀吉が許可を与えれば彼らは島伝いに来襲するだろうともありますので、日本情報をかなり詳しく把握していたようです。そうならないためには太閤に贈り物をするように、ともあります。ちょうど日本軍が朝鮮に出兵しているときで、「私は朝鮮との和平が成らないように切に望む。（中略）さすればマニラは平和なのだから」とも記されています。日本の眼が朝鮮に向いているうちはマニラは安心だ、ということなのです。

秀吉が朝鮮に再出兵する前のことですが、ヘスースはマニラに対して、「日本がマニラを攻撃することはありえないというのは事情を知らぬ人の言葉」であり、非常に切迫した状態であると警告しています（松田『豊臣秀吉と南蛮人』二一四頁）。また彼がフィリピン総督に宛てた別な書簡（同二一六頁）には、「太閤が死ねば二歳の息子しか相続人がおらず、分裂がおこり、マニラは危険から免れるにいたるであろう。ねがわくば太閤の死の早からん

ことを」とあります。秀吉が死んで政権が混乱することを期待しているわけです。

とはいえ秀吉が死んで朝鮮遠征軍が撤退しますと、それはそれでまた不安をかきたてたようです。一五九九年七月、マニラの最高司法院（アウディエンシア）からスペイン国王に宛てた書簡（ファン・ヒル前掲著六四頁）によれば、「太閤が死んだのは昨九八年九月のことだが、その後も用心に用心を重ねて暮らしている。朝鮮からの帰還兵は一〇万人以上で、彼らは貧しく欲に悪かれているのにその地（朝鮮）に期待すべきものをもたない。だから再び当地を脅かすことになる」とあります。朝鮮から帰ってきた多くの兵隊たちが、今度はマニラに眼を向けはしないかと、大いに恐れていたのでした。

秀吉による朝鮮出兵は、失敗したとはいえ、スペイン勢力に対して日本の軍事力の強大さを否応なく知らせることになったようです。早く日本を征服してしまえ、と威勢のよかったフィリッピン総督や宣教師たちは、どこかに行ってしまったかのようです。朝鮮出兵は明らかに日本による侵略行為ですが、世界最強を自負するスペイン人の心胆を寒からしめる効果を発揮していたといえるのではないでしょうか。このことがその後の日本にとってもつ意味は、のちに述べますように相当に大きいと思います。

（3）デマルカシオンと秀吉の東アジア征服構想

以上、すでに紹介されている史料をもとに、西洋列強やキリスト教との関係を再整理してみました。問題は、これをどう総括していくかということです。

まず、これまでの研究史では西洋列強との関係をどのように理解してきたのでしょうか。ここでは北島万次さんのお仕事を参考にしながら（北島万次『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』校倉書房、一九九〇年、第一章）、とくに明征服・朝鮮出兵問題の位置づけに関して代表的なものをいくつか紹介しておきたいと思います。

なぜ秀吉は朝鮮に出兵したのか。江戸時代からいろいろな議論がありましたが、戦前では、秀吉が日明勘合貿易の復活を望んで朝鮮に斡旋をさせようとしたが、朝鮮がこれに応じなかったために出兵したとする説や、後代に名を残したいとする秀吉の功名心説、秀吉の領土拡張欲説などがあったそうです。しかし戦後は、領土拡張を期待する領主階級とヨーロッパ商業資本に対抗する豪商の要求に乗った秀吉の海外拡張策とする説、あるいは武将たちの知行の拡大要求に応じるとともに、家臣団内部の対立を回避し体制固めのために大陸征服を構想したとする説、などが出されています。秀吉による全国平定は大名たちによる国内での領土争奪戦を否定したため海外に新領土を求めざるを得なかったということ、あるいは家臣団の統一をはかるためには軍事動員が不可欠だった、ということでしょうか。しばしば、統一政権の成立にともなう国内矛盾の国外への転嫁、という言い方がなされていたように思います。豊臣政権が集権化のテコとして大陸出兵を掲げたとする朝尾直弘さんの説や、国内平定論理である惣無事令の延長に朝鮮出兵があるとする藤木久志さんの説も、これにあたることになります。

以上は国内的な契機からみた出兵要因なのですが、では国際関

係とはどう関連づけられて議論されてきたのでしょうか。これも北島万次さんの整理を参考にしますと、倭寇やヨーロッパ資本の東アジア進出などにより明の冊封体制が弛緩したこと、豊臣政権が明帝国からの自立を志向し東アジアの征服をめざしたことなどが、朝鮮出兵を可能にした国際的条件として共通理解になっているとのことです。

ただこういった論考を拝見していて、どこまで説明しきれているのだろうかというのが、現在私が抱いている印象です。なぜ秀吉の征服構想が、中国・朝鮮だけではなく、琉球・台湾・ルソンを含めた東アジア全域にまで広がったのか。それを国内的要因あるいは冊封体制の弛緩や、そこからの自立意識だけで説明できるのだろうか、という疑問です。こうした秀吉の東アジア認識は、ポルトガル人やスペイン人がもたらした情報に拠るところが大きいのではないか。そうした意味では、秀吉の西洋列強認識との関係を検討すべきではないだろうか、と考えている次第です。

その際に気になるのが、いったい日本人はいつごろからポルトガル人やスペイン人の世界領土支配の戦略に気づいたのだろうかということです。この点はなかなか分からないのですが、岡田章雄さんがいくつかの事例を紹介しています（岡田章雄『日欧交渉と南蛮貿易』思文閣出版、一九八三年）。たとえば永禄六年（一五六三）にルイス・アルメイダが横瀬浦（長崎県西海市）からインドのイルマンに宛てた手紙によれば、宣教師を受け入れた領主大村氏に対して地元の僧侶たちが、城内に土地を与えて会堂を建てさせるとポルトガル人たちがやってきてそこに城を建て、この地を奪うだろうと批判した、とあります。まずは宣教師が布教をおこない、そのあとに兵隊が占拠するという、まさしくポルトガル／イエズス会の世界戦略の構図で受けとめています。岡田さんもこれについて、明らかに植民地的侵略に対する危惧の表明と評価しておられます。その会堂は、この年に大村氏の家臣によって焼かれました。

またルイス・フロイスは一五七八年（天正六）、豊後のキリシタン大名である大友義鎮に対して重臣の田原親堅が、宣教師たちは日本で相当の数のキリシタンを得たあとにインドから艦隊を派遣して国を奪いとる計画をしていると言った、と書いています（一五七八年一〇月一六日付け臼杵発ルイス・フロイスの手紙）。ここにもかなりはっきりと、征服の先兵としての布教という受けとめ方があらわれています。これは秀吉がバテレン追放令を出す一一年も前のことです。

仏教界はもちろん、在地領主層でもこうした危機感を早くからもっていたわけですから、さらに情報収集能力をもつ秀吉がポルトガルとスペインによるデマルカシオン体制、つまりイベリア両国による世界植民地化戦略というものを知らないはずはないと私は考えています。たしかに天正一五年（一五八七）のコエリョの不遜な態度や比叡山僧である徳運の発言がバテレン追放令の直接的な契機になったのかもしれませんが、その前提には日本社会に存在するイエズス会へのこうした不信感を秀吉も共有していたということがあったのではないでしょうか。

それともう一つ重視しておきたいのは、インド副王への警告です。前に紹介したように、秀吉は天正一九年（一五九一）七月、ポルトガル領インド副王に書翰を出して、明征服計画を知らせると

ともに日本での布教禁止を通告しました。これを評して私は、ポルトガルの世界植民地政策が日本には通用しないことを警告したものだと述べました。布教活動のあとに来るものを秀吉が当然予測していたからこその警告だった、といってよいと思います。

これとの関連でもう一つ注意しておきたいのは、慶長二年（一五九七）七月、秀吉がフィリピン総督に出した書翰です（『異国往復書翰集』七八頁）。その前年、土佐に漂着したスペイン船サン・フェリペ号の積み荷を没収されたことに抗議したフィリピン総督に対する返書なのですが、次のようなことが述べられています。

「（略）その国においては布教は外国を征服する策略または欺瞞なることを聞きたればなり。（略）予は思うに卿がこの方法を用いて其の国の古来の君主を追い出し、ついにみずから新しき君主となりたるがごとく、卿はまた貴国の教えをもって我が教えを破壊し、日本の国を占領せんと企画せるならん。是ゆえに予は前に述べたる所に対して憤り怒を懐ける時（略）」（同八〇頁）

ここに述べられていることは、スペインは布教を足がかりに外国を征服しているが、フィリピンでもこの方法によって君主を追放し、みずからが君主になっているではないか、同様の方法で日本を占領しようとしているに違いない、怒りを抑えることができない、という強いスペイン批判です。だから日本と交誼を結びたいのであれば布教をせず、単に「商賈往還」のためにのみ来航せよ、さすれば安全を保障する、という内容でした。要するに秀吉はスペインに対して、布教を隠れ蓑にした日本侵略は絶対に許さないと警告したのでした。

こうした動きを前提としたときに、秀吉の海外征服構想を単に国内的契機の延長や中国の冊封体制からの自立・克服ととらえるだけでよいのだろうか、と思わずにはいられません。イベリア両国の世界戦略を知ったことが、秀吉の外征意欲を触発し、単に朝鮮や中国ということだけでなく、東アジア全域（中国・朝鮮・琉球・台湾・マニラ）の征服構想へと展開したのではないかということです。

秀吉の東アジア征服構想について、藤木久志さんの『天下統一と朝鮮侵略』（講談社学術文庫、二〇〇五年）には次のようにあります。

「西ヨーロッパ勢力の侵入による東アジア世界の激動のなかで、日本中世国家の解体を果たすためには、伝統的にこの国家を支えてきた中国・北京を中心とする東アジア秩序に叛逆し、いわば北京上洛をなしとげることは、日本の新しい支配階級が、みずからの国家を樹立していくための緊急の課題であった」

東アジア世界の激動をもたらした要因として西ヨーロッパ勢力の侵入があげられていますが、秀吉の朝鮮出兵や明征服構想は中国を中心とした東アジア秩序への叛逆であったという理解です。あくまで中国の冊封体制へのチャレンジ意識が強調されているようにみえます。

朝尾直弘さんは、「大明之長袖国」すなわち公家の国家である中国に対して、「弓箭きひしき国」日本という意識を対置させ、武威の国であるとする自己認識が東アジア全域に対する尊大な武力示威外交展開の基調になったと指摘しています（「鎖国制の成

立」講座日本史4、東大出版会、一九七〇年)。やはり秀吉の主要なターゲットは中国だという認識だと思います。

かくして研究史の大勢は、中国の冊封体制こそ秀吉が打破すべき国際秩序としてとらえているようです。確かにそのような要素は強いので、それはそれでよろしいのだと思います。しかしそれだけではないようにも思われる、というのが私の考えです。私はこうした考えに加えて、スペイン・ポルトガルによるデマルカシオン体制(世界侵略体制)に対抗する東アジア秩序の構築、という評価にまで広げていった方がおもしろいのではないかと考えています。朝鮮支配をふまえて中国を征服し、北京に天皇を動座させて東アジアの首都とする。これは明らかに日本を中国に取って代わらせる構想ですし、巨大な東洋帝国の構築を夢想したのだと思います。しかし秀吉が視野に入れていたのは、さらにそれを越えてスペイン・ポルトガルだったのではないでしょうか。

では、秀吉が描く「スペイン・ポルトガルに対抗する日本」という構図を、どこから読み取ることができるのでしょうか。それは先に紹介した天正一九年(一五九一)七月のポルトガル領インド副王への書翰、および慶長二年(一五九七)七月にスペイン領フィリピン総督に出した書翰です。これらの書翰では、明確に布教と貿易を切り離すべしと通告し、布教をテコとした侵略を強烈に批判するメッセージが発せられていました。ここではもう一つ、文禄二年(一五九三)一一月二日の秀吉からフィリピン総督に宛てた書状(『異国往復書簡集』五九頁)をあげておきたいと思います。

その書翰では、秀吉が日本全国と高麗(朝鮮)を獲得したこと、多くの武将がマニラ占領を求めているが、いま自分はそれを抑えていることなどを書いたうえで、「支那に赴けば呂宗は甚だ近く、予が拇指の下にあり。我らは永久に親しく交わるべし。このことをカステリヤ(スペイン)に書き送るべし。カステリヤの王、遠方にあるというとも予が言を軽視すべからず」と述べています。

第一次朝鮮出兵の最中ですが、その前には日本に服属せよという強硬な書翰をフィリピン総督にたびたび送りつけています。しかも、中国を征服すればルソンはすぐその先だ、とまで言っているのですから、いくら親しく交わろうと言っても脅し以外のなにものでもありません。フィリピン総督は翌年、秀吉に返書を遣わして、「服従のことを言ってきているが、スペイン国王は強大であり、フェリペ国王以外に従うことはない」と反発しています(同六二頁)。ただ私がここで注目しておきたいのは、フィリピン総督に対して秀吉が、こうした事態にあることをちゃんとスペイン国王に伝えろと、言っている点です。つまり日本がフィリピンに日本への服属を求めてきていることや、朝鮮を服属させ明征服も間近であることなどをスペイン国王に伝えよ、決して日本を軽んじてはならない、と警告しているところに、秀吉の対スペイン意識が強烈に発揮されていると思うのです。これはフィリピン総督やスペイン国王に対して、日本という国および豊臣秀吉という人物の強大さを誇示したものだといわざるをえません。

では、そのことはいったい何を意味するのでしょうか。単に秀吉が強がりを言っているだけなのでしょうか。従来はそのように解釈されていたのかもしれません。しかしこうした秀吉の言動は、西洋最大の大国に対する強烈な対抗心と自負心を示していると考えます。秀吉がめざしたのは、単にに明の冊封体制からの自立と

いうだけではなく、世界最強国家スペインと対抗し、東アジアを日本の版図に組み込んでいくことだったのではないでしょうか。言葉をかえていえば、世界の植民地化をめざすイベリア両国に対する東洋からの反抗と挑戦ともいえるでしょう。

こうした秀吉の振るまいは、スペインの前線基地マニラに恐怖感を与えました。朝鮮出兵や明の征服計画、そしてマニラ服属要求などを突きつけてくるわけですから、スペイン側はメキシコやペルーなどのように簡単に日本を征服できないことを次第に認識していくことになります。つまり秀吉の国際的な軍事行動や強硬外交は、スペインの日本征服計画を強烈に牽制し、抑止する効果を発揮することになったのでした。秀吉以前までイベリア勢力では「布教・武力征服」論が盛んでしたが、秀吉段階ではそれが不可能であることを悟り、その結果、後述するように家康段階では、「布教によるキリスト教化→日本支配の実現」という二段構えの対日戦略へと大転換がおこなわれたのでした。

四　徳川幕府の初期外交

(1)全方位外交の展開とキリスト教政策

次に徳川初期の外交と列強の問題を取り上げていきます。豊臣秀吉のあとに実権を握った徳川家康は、これも従来の研究で明らかにされているようにアジア・ヨーロッパ諸国との間で全方位外交を展開しています。

ヨーロッパ諸国との関係では南蛮貿易に出遅れていた家康は慶長三年(一五九八)、宣教師ヘスースに対してマニラとの貿易の仲介を依頼しています。またオランダとの関係は豊後に漂着したリーフデ号乗組員が慶長一〇年(一六〇五)に帰還する際、オランダ国王宛てに通商を求める親書を託し、それに応じて同一四年、オランダ東インド会社の船が平戸に入港したことから開かれました。イギリスとの関係は、そのオランダ船リーフデ号に乗船していたウィリアム・アダムスの仲介により、同一八年、イギリスのセーリスが国王の親書を家康に呈して通商が開始しています。この間、イエズス会は家康に対してオランダ人やイギリス人は海賊であるとして処刑を求め続けたということです。しかし家康は、イギリス人のウィリアム・アダムスやオランダ人のヤン・ヨーステンを外交顧問にしています。さまざまな可能性を模索していたということでしょうか。

一方、東アジア諸国との関係ですが、家康は朝鮮出兵の後始末をするために慶長四年に対馬の宗氏に朝鮮との講話を命じ、同一二年に朝鮮から回答使兼印還使が派遣されて事実上の日朝講話が成立します。またカンボジア、安南、占城などの東南アジア諸国との間で、慶長一〇年には親書を交換して通交の確認と安定がはかられています。琉球に対しては同一四年の島津氏の侵攻により、幕府に対して慶賀使・謝恩使が派遣されるようになりました。明との間では勘合貿易の復活を期待していましたが、明が拒否したために、長崎に明の商人を受け入れることで中国との貿易関係を樹立しています。

こうして徳川家康と二代将軍秀忠は、各国商人に寄港地選択の自由と生命財貨の安全を保障し、アジア・ヨーロッパ諸国との多

国間通商を模索しました。しかしキリスト教に対しては慶長七年（一六〇二）九月にフィリピン総督宛の家康親書で布教禁止を通知しているように（『異国日記抄』二五八頁）、厳しい姿勢をみせました。なぜ家康が布教禁止に踏みきったのかについて、在日司教セルケイラがマニラのイエズス会に宛てた書簡（一六〇二年一〇月二二日付）には、次のようにあります。

「内府（家康）をはじめ異教徒の大名たちは、太閤と同様に、ルソンやメキシコのスペイン人は他国を侵略するものだと固く信じている。サン・フェリーペ号の船員がいったように、布教は侵略の手段にすぎぬと思っている。」（松田毅一『慶長遣欧使節』朝文社、一九九二年、六〇頁）

家康は秀吉と同様に、スペイン人が日本を侵略するのではないかと危険視している、というわけです。それまで世界各地で展開してきたスペインの領土拡張政策をみれば、セルケイラがいうように、家康の懸念は当然でもありましょう。これより前の慶長三年には宣教師ヘースにマニラとの貿易仲介を依頼していたのですから、マニラから船が来るようになり、宣教師たちも自由に活動している様子をみて、侵略への不安が高まったのかもしれません。

そういう眼でみたとき、このキリスト教の布教禁止通知を、「布教は駄目だが通商はいいよ」と、商教分離を明確にし経済的関係を基軸にした友好を呼びかけたものとだけみるのは不十分なように思います。むしろ、布教と一体化した植民地政策が日本には通用しないことを警告するという、そうした意味合いを強くもった内容だと理解してよいのではないでしょうか。慶長一〇年にも家康は同様の書翰をフィリピン総督に送りました。

しかし、スペイン側はあくまで布教と貿易を一体化した関係に固執します。その狙いはいったいどこにあったのでしょうか。またなぜ徳川政権は、スペインとの断交を選択したのでしょうか。その経緯について、みていきたいと思います。

（2）スペインの野望

（a）前フィリピン臨時総督ロドリゴと家康の交渉

スペインと日本との関係が大きく動くのは、慶長一四年（一六〇四）、前フィリピン臨時総督のドン・ロドリゴ・デ・ビベロがメキシコに帰る途中、日本近海で遭難して上総国岩和田に漂着してからのことでした。救助されてから翌年帰国するまでの事柄が『ドン・ロドリゴ日本見聞録』（異国叢書、雄松堂）として刊行されています。そこで以下ではこれをもとに、ロドリゴの思惑をクローズアップしていきたいと思います。

遭難者がフィリピンの前総督であることを知った家康と秀忠は、彼を引見しました。その際ロドリゴは、自分を世界最強であるスペイン国王の大臣として遇することを求めるなど、かなりしたたかに振る舞っています。しかもスペインとの友好はもちろん、宣教師の保護やオランダ人の追放なども要求しています。これは、家康がマニラおよびメキシコとの通商を強く望んでいることを知ったからでした。オランダ人を追放すれば期待に応えますよというわけですから、さすが前総督、ただ者ではありません。外交駆け引きも相当にうまいものでした。

それに対して家康は、オランダ人の在留を認めたばかりなので

すぐに追放することはできないが、二年間の滞在期限が来たら退去させることを約束し、宣教師の滞在も許したということです。ロドリゴはオランダ人は海賊だと強調しましたので、家康は「オランダ人の暴状を知ったことは将来のために喜ぶことなり」と回答しています。オランダについてはしばらく様子をみるということでしょうが、この段階の家康は旧教国・新教国のいずれにも過度に傾斜しないというスタンスが見て取れます。また宣教師の滞在を容認したことも、慶長七年や同一〇年に通告した布教禁止を転換させるものでした（『日本見聞記』五一頁）。貿易を実現させるためには宣教師の滞在＝布教は容認せざるをえない、と判断したのだと思われます。

キリスト教に対する家康の考え方が転換したことを示す逸話が、ロドリゴの『日本見聞記』に収められています。京都を見学しているときに耳にした話のようです。

「（日本の）坊主等悉く団結してわが宣教師等を日本より放逐せんことを請願せしとき、皇帝は彼らの挙げたる理由に詰められ、日本にある宗派の数幾何なるかと尋ねしに、君より三五なりと答えたれば、皇帝（家康）は直に三五あらば三六となるも妨げなかるべし、これを存せしめよと言へる由なり」（同五一頁）

どうやら家康は、すでに宗教は三五宗派もあるのだから、キリスト教が増えたとしても三六宗派になるだけではないかと、かなりおおらかに考えようとしたようです。

（b）ロドリゴの日本征服構想

ところでこの『日本見聞録』には、ロドリゴの日本観がかなりあけすけに語られています。部分的には利用されていますが、高瀬弘一郎さんが秀吉期についてやったような、スペインの対日戦略の分析としては十分に利用されていないように思います。そこで彼の発言をいくつか紹介しておきましょう。

「日本には多くの都市があり、いずれも人口が多い。全国どこでも米・小麦・大麦を豊かに産出し、狩猟と漁業の収穫量もイスパニアに勝る。銀の鉱脈も多く、金の質はきわめてよい。〜このように広大にして繁栄する大王国に進入することはスペイン国王にとってきわめて有利なことだ」（『日本見聞記』一一三頁）

日本の豊かさを誉めあげていますが、これに続けて彼は、こう言います。「私が思うに、この地（日本）に欠けている唯一のことは陛下（スペイン国王）をその国王としていないことだ」と。要するにスペイン国王こそがこの豊かな日本を支配しなければならない、ということです。しかし、「武力による進入は困難だ。なぜなら、住民多数にして、城郭も堅固だからである。新イスパニア（メキシコ）の土人のように野蛮なら恐れるに足りないが、日本人は弓・矢・槍や刀を有し、長銃を巧妙に使う。スペイン人と同じように勇敢なだけではなく、議論と理解の能力においてもこれに劣ることはない」（同一一四頁）としています。

メキシコ先住民はいとも簡単に屈服させることができたが、日本人には知性もあり軍事力もあるので征服は困難だ、と言っています。ロドリゴは滞日中に江戸、駿府、京都、大坂、豊後臼杵な

どあちこちの都市や地方を見て回っていますので、その認識がここには反映しています。しかしそれだけではなく、彼は臨時とはいえ前のフィリピン総督ですので、秀吉期における日本とフィリピンとの関係、または朝鮮との関係も知っていたと思います。日本の軍事力の強大さ、そして強硬的日本外交を肌身に染みて感じていたのではないでしょうか。

しかしだからといって、ロドリゴが日本征服をあきらめているわけではありません。では彼が考える、日本をスペイン国王の支配下におくための戦略とはどのようなものなのでしょうか。彼はこう述べています（同一一四頁以下）。

「武力による侵入の困難なること、真に確実なりとすれば、我らの主なる神の開き給へる聖福音宣伝の途により、彼らをして陛下に仕ふることを喜ぶに至らしむる外、選ぶべき途なし」

「キリスト教を弘布し、キリシタンの数増加するに至らば、現皇帝（家康）および他の皇帝（秀忠）死したる時は、新王は彼らを苦しむべきこと明らかなる者の中より選ぶことなく、陛下（スペイン国王）を挙ぐべしと考えられる」

まずはキリスト教化を進めることによって日本人の精神世界を掌握し、そして入信したキリシタン大名や一般のキリシタンたちによって徳川将軍家が排斥され、スペイン国王が日本の国王に推戴される、という見通しを述べています。その布教を効果的に進めるためには、宣教師をたくさん日本に投入しなければなりません。そこでロドリゴは、「皇帝（家康）が新イスパニア（メキシコ）貿易開始を望むを好機会」とし、家康の求めるスペイン人鉱夫や官吏のために司祭を同伴させることを要求しました。これを許容すればスペイン国王も通商を開くと懐柔しています。しかし、「その真の目的」は、「鉱山またはその付近にあるイスパニア人の間に居住せしむるを名として、諸宗派の宣教師をこの地方に入れ、各地に散在して努力し、前に掲げたる収穫を納めしむる」（同一一六頁）ということでした。「前に掲げたる収穫」とは、スペイン国王による日本支配のことです。ここには、まさに布教を先兵として領土化をはかる戦略が赤裸々に語られていたのでした。

かくしてロドリゴはスペイン国王に対して、日本と通商を開いた方がよいと上申しますが、彼にはもう一つの狙いがありました。それはオランダを日本から追放させるためだということです。オランダ人が日本を拠点に東シナ海の制海権を掌握すると、スペインが支配するフィリピン諸島は孤立しかねない。だからこそ家康の希望通りにメキシコとの通商を認めることが、日本からオランダ人を追放させる有力な方法だと提案したのでした。そうすれば東シナ海や東南アジア海域においてもスペインのオランダに対する優位性が確保できるという目論見でした。もしメキシコとの通商が叶わなければ、日本はオランダとの関係を大事にすることになって、スペイン側が不利になってしまいます。したがって日本との通商関係の確立は、たんに日本征服の第一段階としてだけではなく、オランダとの対抗関係からも不可欠だというのがロドリゴの認識だったのでした。

家康との交渉は、ほぼロドリゴの期待通りに進展したようです。慶長一五年一月（一六一〇年二月）、家康とロドリゴは、日本からスペイン国王とメキシコ総督へ使者を派遣し、通商交渉をおこなうことで合意しました（同一三一頁）。これについてロドリゴは、

スペイン国王に次のように報告しています。

「新世界の門戸は此のごとくして開かれ、数年の内に陛下の領有に帰するを実地に見んことを神に於いて期待す」（同一二四頁）

みずからの手腕でここまでこぎつけたことに自尊心を膨らませつつ、この通商交渉がスペインによる日本領有の第一歩になる、と強い期待をみせています。そして同年六月、家康はロドリゴに船を提供してメキシコに送り届けると共に、フランシスコ会布教長フライ・アロンソ・ムニョースを家康の使者として一緒に乗船させました。

（C）ビスカイノの交渉

日本からの使者に対して、メキシコ総督は一六一一年に答礼使としてセバスチャン・ビスカイノを日本に派遣します。ビスカイノもまた、日本とメキシコとの交易を推進し、それによって日本のキリスト教化を目ざすという、ロドリゴと同じ考えを持って日本にやってきます。ビスカイノ『金銀島探検報告』（雄松堂、異国叢書）には、次のようにあります。

「〜当国とイスパニアとの交通貿易継続すれば神佑によって帰依者は増加し、神は悪魔の掌中より当国にある多数の霊魂を救い給うべきこと疑いなし」

ビスカイノもやはり家康がメキシコとの交易に前向きであることをみて、次のようにオランダとの断交を交易の条件として提示しています。

「渡来の主要な用務は皇帝がオランダと親交を結び当国に入ることを許すか否かを知ることにあり。もしこれを許せば我が国王は貿易のために当国に来ることを好まず、すでに端緒を開きたる平和は結果をもたらすに至らざるべし」（同七三頁）

スペインを取るかオランダを取るか、と日本に迫っています。かなり強気に出ていますが、交渉途中の慶長一六年末に岡本大八事件が発生します。キリシタン大名有馬晴信から本多正純の家臣である岡本大八が資金を詐取した事件ですが、これが露見して家康が激怒しました。この事件とキリシタン取締りの関係が不分明なのですが、両人ともにキリシタンであったことから、翌一七年からキリシタンの取締りを強化し、江戸の会堂等の破壊を命じたとされています。

慶長一七年六月、家康がメキシコ総督に宛てた返書では、「我が国は神国なり。貴国の法ははなはだ異なるなり。我が国にその縁なし」として、さらに「ただ商船来往して売買の利潤、偏にこれを専らとすべし」（同一四〇頁）と述べています。ここにいたって、幕府がそれまでの容教姿勢を放棄したことがはっきりとわかります。

この「我が国は神国なり」という言葉は、秀吉も述べていました。「神国」思想との理念的対立がキリスト教排除の理由とされることが少なくないと思います。しかしそもそもは、「キリスト教の布教＝スペインの脅威」を排除する理由として「神国」論が考案された、という経緯があります。その意味でこの「神国」論は、禁教を正当化する、国の内外向けの説得言語だといってよいのではないでしょうか。「神国」思想自体はもともと日本に存在していますが、対外関係のなかでキリスト教と対置する形で位置

づけなおされて発信されました。

前にも触れたように、秀吉も当初はキリスト教を認めていたました。家康もロドリゴに対応した際、キリスト教を仏教を含めた諸宗派の一つとして容認していました。しかし、これがどうしてキリスト教＝「邪法」観へと転換するのでしょうか。それは両人が「布教＝征服」の連関に危機感をもった点にあるわけです。日本は神国だからという点からこの「邪法」観が出てきたわけではなく、「布教」と「征服」が一体化しているところに、キリスト教の「邪法」性を読み取ったのではないかと、私は考えています。

ところで、前述のようにビスカイノの眼前でキリスト教排除の動きが始まったのですから、彼は憤懣やるかたないわけです。家康をとんでもない「悪皇帝」だと罵っています（同一四七頁）。慶長一七年八月、ビスカイノはメキシコへ帰国しようと出帆しますが、遭難してまた浦賀に帰港せざるをえませんでした。当初、家康や秀忠は船の修繕費を出すといっていたのですが、その後は全然相手にしなくなったとビスカイノは嘆いています。家康と秀忠には、キリスト教あるいはスペインという国に対する嫌悪感が徐々に高まっていったのかもしれません。

五　伊達政宗の支倉常長遣欧使節

そこに助け船を出したのが伊達政宗でした。彼は慶長一七年（一六一二）一二月、ビスカイノに新造船の提供を申し出ます。これが本当の助け船ですね。この新造船はサン・ファン・バウティスタ号と名付けられました。現在復元されて、石巻に繋留されています。同船は慶長一八年九月、メキシコに向けて牡鹿半島を出帆しました。それを案内したのが宣教師のルイス・ソテロで、政宗の使節として支倉常長が乗船します。支倉は政宗のスペイン国王とローマ法王宛ての親書を持っていきました。ソテロは家康と秀忠のメキシコ総督宛親書を預かっていましたので、幕府の使者としての性格も持っていました。

この船でビスカイノもメキシコに帰国するのですが、帰った途端に日本との通商に強く反対をしています。家康と秀忠のもとでの布教活動は絶望的であり、そのような国と通商しても意味がないと主張します（同一七六頁）。

しかし、ソテロはビスカイノとは全く逆の考えでした。政宗や家康たちに使節を派遣するよう誘ったのはソテロです。彼は太平洋貿易を「マニラ―中国―日本―メキシコ」の環で構想していました。ソテロはオランダやイギリスと対抗するためにも日本皇帝の要望を叶えることが大事だと考えていたのです（『大日本史料』第十二編之十二、四五頁）。

一方、政宗も奥州という立地の関係から南蛮貿易に出遅れていましたので、なんとかルソンあるいはメキシコとの通商を開きたいと考えていました。南蛮商人を領内に呼び込むために、政宗は布教にも寛容でした。だからこそソテロは政宗にスペイン国王への使節派遣を勧めたのです。

なお岡本大八事件以後、家康はキリシタン統制を強め、ビスカイノをかなり冷遇しましたので、その段階ではおそらくメキシコとの通商断念も考えていたのだと思います。しかし、支倉常長を

案内するソテロにメキシコ総督への親書を託しました。家康のこの動きは、いったいどう考えればよいのでしょうか。

家康のメキシコ総督宛の書翰には布教禁止が明記されていますので（『増訂異国日記抄六四頁）、禁教政策に変更はありません。しかし伊達政宗がスペイン国王やローマ教皇に宛てた親書では宣教師の派遣を求めています。サン・ファン・バウティスタ号には幕府役人も乗り込んでいますし、出帆前に政宗は家康や秀忠と打ち合わせた形跡がありますので、幕府もそのことを承知していたと思われます。にもかかわらず家康がこれを容認したのは、布教は伊達領に限るという前提があったからではないかと、私は推測しています。

スペイン側は布教の可能性がなければ貿易も認めません。したがって少しでも貿易の可能性を探るとすれば、家康も伊達領での布教は容認せざるをえないことになります。そして政宗が派遣する支倉常長の通商交渉が成功すれば、スペイン船が伊達領内に入ることになります。家康はその一部を関東に寄港させようと考えていたのではないでしょうか。そうすれば幕府の禁教政策と貿易の実現は両立できるからです。家康がメキシコ総督に宛てて、布教禁止と共に通商を求めたのは、このような思惑があったからではないかと考えられます。もちろん、伊達領だけの布教でスペイン側が満足するかどうかは、この段階ではまだわかりませんが。

したがってソテロは、幕府は禁教であっても伊達領内は布教が可能であること、そしてそれこそが将来の展望を開くものであることを、メキシコやスペイン、ローマで必死に主張しました。もしメキシコとの通商が開かれれば、より大きな貿易に魅力を感じた家康は布教禁止を撤回するかもしれません。統制と容認の間を揺れ動いてきたそれまでの家康をみれば、この可能性も否定できなかったのではないかと思います。しかしソテロは、家康が禁教政策を転換させなかった場合も想定していました。それが、「政宗は次の皇帝」であるというアピールだったのです。

一六一四年九月、ソテロがスペイン宰相のレルマ公に宛てた書翰（前掲『大日本史料』一三二頁）には、「この王（奥州の王）は日本の最も強大なる王の一人にして、現時の治者に次いで帝位に上がるべき人なりとは一般に考えるところなり」とあります。また一六一五年一一月七日に実施された支倉常長のローマ教皇謁見式ではソテロが通訳をおこないますが、そこでソテロは、「大使（支倉）の主君は遠からずして日本皇帝の位に即くべきもの」と言上しています（同一三二頁）。これに乗せられた宰相レルマ公は、一六一七年にスペイン国王に対して次のように奏上しました。

「奥州の王は日本の皇帝に服従したる諸王中、もっとも強大なるものにして、現皇帝の死後、帝位にあがるべき望みあり。彼もし我に対して好意あれば、皇帝たるに及んで布教のため大なる便宜あるべし」（同四一五頁）

仮にいまは伊達領だけの布教であっても、いずれ伊達政宗なる奥州の王が皇帝になったあかつきには日本全国の布教が可能になるだろう、というわけです。当面は伊達領だけでもいいとソテロが考えたのは、こうした戦略を描いていたからに違いありません。

ところがなかなか事態が思うように進まないことに焦ったソテロは、一六一八年、レルマ公に対して次のように言上しました。

「彼（政宗の家臣横沢将監）の言によると、政宗は臣下の悉く

教徒とならんことを望み、またみずからキリスト教に帰依し、皇帝より迫害を受けつつある三〇万人の教徒を部下となし、その助成によりて皇帝となり、自ら永く帝位にあらんことを希望する由なり」（同前四三五頁）

なんと政宗が日本人キリスト教徒と連携して皇帝（将軍）位を簒奪する、とまで言い出したのでした。現在、政宗はスペインと連合して幕府を倒す野望をもっていたという説が出されていますが、それはこうした史料がもとになっています。政宗討幕野望説はじつは成り立たないのですが（拙稿「慶長遣欧使節と徳川の外交」『仙台市史特別篇　慶長遣欧使節』二〇一〇年）、話がそれますのでここでは省略します。

以上のようにみてきますと、ソテロは二段構えの計画を立てていたといえます。第一は、政宗と家康の使者として通商交渉の成功を勝ち取り、布教に否定的な家康の姿勢転換を引き出すということです。第二は、布教を容認する政宗を日本人キリシタンの支援により「次の皇帝」として担ぎ出して討幕を実現し、日本のキリスト教化をはかる、ということです。

禁教政策を強めつつあった徳川政権をみたビスカイノは、布教の可能性はないと判断して日本との通商に反対しました。しかしソテロは、スペインが通商を認めれば日本には布教のチャンスが生まれると考えたのです。ただこれまで紹介したことからも分かりますように、ソテロにとってメキシコと日本との通商は、あくまで布教を実現するための手段にすぎません。その布教は、日本をキリスト教化しスペイン国王およびローマ法王の支配下に組み込むためのものであったことはいうまでもありません。

とはいえ、日本におけるキリスト教排除の情報が支倉滞欧中も次々に宣教師たちから伝えられ、ソテロの情報と主張は次第に信用されなくなってしまいます。ローマ教皇はかなり好意的に対応しますが、スペイン国王は通商を認めず、当面は宣教師を派遣して様子をみるという決定を下しました。布教が順調におこなわれるようであれば貿易も認めよう、という判断です。

この考え方はソテロとは逆でした。ソテロは禁教政策を転換させるためにこそ通商関係を開くことが不可欠だと考えていました。しかしスペイン国王は、禁教政策を転換することこそが通商関係を開く条件だという方針を採ったのでした。

まずは宣教師だけを派遣するというスペイン国王のこの判断は、貿易を希望する政宗にとって何のメリットもありません。もし政宗が貿易も開かずに宣教師だけを伊達領に受け入れたとすれば、むしろ幕府との関係は爆弾を抱えたようなものになったと思います。そうであるがゆえに政宗は、支倉が帰国して交渉が失敗したことを知ると、すぐに領内に禁教令を布いてキリシタンの取締りに乗り出したのでした。これによって、布教をテコとしたスペインによる日本征服計画は完全に破綻することになったのです。

六　家康の外交と政宗の外交

（1）最後の戦国大名型外交

ここでは、慶長遣欧使節が近世初期の外交史・国家史のなかで

どのような歴史的意義をもつのかということについて、新しい論点を提示したいと考えています。

まず家康の外交的立場ですが、キリスト教政策について多少の揺れはありましたが、最終的には禁教という方向がはっきりと示されます。しかしスペインとの貿易については家康と秀忠のメキシコ総督宛親書をソテロに託しているように、通商に対する期待はまだ持っていました。その点で家康の外交姿勢は、商教分離外交であるということができます。

これに対して伊達政宗は容教であり、伊達領に宣教師を派遣してほしいという親書をスペイン国王とローマ教皇に出しています。もちろん究極の狙いはメキシコとの通商ですので、徳川とは異なって商教一致外交だといってよいと思います。

このように両者には、大きな違いがあります。しかし、政宗が派遣した遣欧使節は教科書に載るほど有名ではありますが、近世初期外交史のなかでは必ずしも十分な位置づけがなされていないように思われます。徳川幕府の動きだけではなく、政宗の遣欧使節を合わせみると、大変おもしろい論点が浮かび上がってくるのです。

サン・ファン・バウティスタ号には伊達政宗の使者としての支倉常長、幕府の使者としてのルイス・ソテロが乗り込んでいます。その幕府と政宗の外交姿勢はかなり異なるわけですから、サン・ファン・バウティスタ号は徳川初期の二元外交を典型的に示すものだといえるのではないでしょうか。そして問題になるのは、なぜこうした二元外交が可能になったのかという点にあります。

ここで肥前の鍋島勝茂の例を紹介しておきます。鍋島も慶長一四年(一六〇九)から一八年にかけて、フィリピン総督やマニラ司教らと親書を交換しています(『異国往復書翰集』一〇〇頁以下)。特に注目しておきたいのは、慶長一七年に鍋島勝茂がスペイン国王に親書を遣わし、金屏風を贈ったという点です。この親書で鍋島が、フィリピンだけではなくメキシコ交易までも期待したのかどうは分かりません。しかしこの親書は、伊達政宗が支倉常長をスペインに派遣する前年のことでした。

鍋島のスペイン国王への親書が幕府の了解を得ていたのかどうかは、残念ながら分かりません。しかしはっきりしていることは、鍋島勝茂と伊達政宗がほぼ同じ時期に、幕府とは独自にスペイン国王と交渉をおこなったという事実です。鍋島や伊達以外の大名に、同様の動きがあったのかどうかは、まだ把握しておりません。いまのところ、鍋島の慶長一七年、伊達の慶長一八年の親書が最後のように思われます。もしこれ以降にも事例が出てくれば、それはそれでおもしろい話になると思います。

一方この時期の対外関係をみますと、朱印船貿易の時代です。朱印状の発給権は徳川幕府が掌握しており、幕府の許可のない船が海外貿易をすることは原則としてできない状態になっていました。しかし鍋島や伊達の事例をみると、親書交換までは規制できていなかったということになります。そういう意味では、幕府による外交権は朱印船発給権による貿易統制までであって、親書交換等の外交交渉について幕府は十分に統制下におくことができてはいない、ということができます。つまりこの段階の幕府は、国家としての外交権を、まだ完全には掌握しきれていない状態だということになります。

さて、このことをもう一度、時系列的に整理してみます。九州や西日本の大名たちの南蛮貿易は秀吉段階まで普通におこなわれていました。鍋島勝茂や伊達政宗がやっていたような親書交換を含めた大名外交も、ほかに事例があるのではないでしょうか。こうした動きについて、大名レベルで独自の外交を展開したという意味を込めて、戦国大名型外交と命名しておきたいと思います。

徳川政権の時代になると、キリスト教統制や大船建造禁止令などと重なって大名の独自外交が徐々に困難になっていきます。多くの大名も幕府の統制に従うようになっていきました。しかし、サン・ファン・バウティスタ号は約五〇〇トンの西洋式大型外洋帆船ですので、大船建造禁止令は伊達政宗の船には適用されていないことになります。また政宗はローマ教皇やスペイン国王に宣教師の派遣まで求めたのですから、幕府のキリスト教統制の枠からも外れていたことになります。ところが支倉常長が通商交渉に失敗して帰国した途端、政宗はキリスト教禁制を領内に布告しました。またそれ以降は、政宗のみならずどの大名も西洋式大型外洋帆船を建造してはおりません。

こうした流れからみると、政宗の遣欧使節、すなわち政宗の外交の失敗こそが幕府による外交権の一元的掌握を可能にしたということができると思います。その意味で伊達政宗の慶長遣欧使節は、戦国大名型外交の最後の事例であり、その失敗が近世的徳川外交体制の確立に大きな契機を与えたということができるのではないでしょうか。

なお、徳川家康が伊達政宗の遣欧使節派遣を認めた背景には、政宗の商教一致外交を容認せざるを得ない両者の力関係があったのではないでしょうか。まだ豊臣方が存在した段階のことですので、家康が政宗に配慮せざるを得ない地政学的関係があったのだということを考慮に入れておきたいと思います。

(2)家康の国家構想と政宗の国家構想

家康や秀忠は、キリスト教的文明化を拒否した国家体制を模索しました。一方、政宗は、貿易のためとはいえ領内でキリスト教を容認する姿勢を明確にしていました。これを突きつめていえば、政宗はキリスト教布教が可能な国家体制を前提にしていたということになります。

したがって、政宗のキリスト教容認国家構想と家康の非キリスト教国家構想は、どのような国造りをするかという点で原理的に異なっているといえます。通商交渉をめぐる幕府と政宗との姿勢の違いということだけではなく、根本には国家構想の大きな相違が存在していたといえるでしょう。だからこそ、在日宣教師や国内キリシタンからは「皇帝政宗」待望論が出たということもできます。

ただしスペインとの通商交渉は成立せず、その結果、日本は非キリスト教国家体制の構築へと一気に向かっていくことになりました。政宗の容教国家体制は実現できなくなったということです。その意味で慶長遣欧使節による通商交渉の成否は、その後の日本のあり方に重大な影響を与えたということができるのではないでしょうか。

もし、政宗の遣欧使節が通商交渉に成功していたら、どうなっていたのだろうか、と考えると非常におもしろいと思います。そ

うであれば、歴史の展開は大きく異なっていた可能性があります。スペインとの通商が開かれるということは、伊達領国のキリスト教化が進展するということにつながります。はたして幕府はそれを容認したでしょうか。一時的には容認したとしても、もともと目ざすべき国家体制が異なるわけですので、そう遠からず、いずれかの清算がはかられることになったのではないでしょうか。考えようによっては、支倉使節が交渉に失敗したからこそ伊達家の存続を可能にした、といえるかもしれません。

おわりに

ここでは、戦国の群雄割拠が持つ二つの意味について述べておきたいと思います。

まず第一は、分裂国家としての意味です。分裂しているわけですから、国家としての統一的意思の形成は極めて困難でした。そこに有力大名の信徒化や大名間争乱の画策など、イエズス会による日本征服戦略がはたらく余地があったといえます。第二は、戦国大名間の猛烈な軍拡競争体制としての意味があります。戦国の群雄割拠というのは列島全体が戦時体制であったわけですから、軍事力は最大規模になっています。

そうしたなかで、秀吉や家康によって統一政権が樹立されていきます。これはどういう転換をもたらすかといいますと、第一には国家意思の一元化が可能となって、それが秀吉のバテレン追放令や徳川政権の禁教令につながっていくことになります。第二としては、軍事力の国家的な集中がおこなわれることです。朝鮮出兵における動員体制などは、まさにこの集中的編成を実現したものでした。秀吉や家康政権期に、日本は世界屈指の軍事大国としての姿をくっきりと現したといえます。

このような状況を受けて、スペインが日本を軍事的に征服することを断念し、布教優先論へと転換をしていきます。今回はかなり大雑把な指摘になっておりますが、スペイン側における対日戦略の段階的変化というものを、秀吉・家康政権の動きのなかで丁寧に位置付けていくとおもしろいのではないかと考えております。

なお、オランダやイギリスなどの新教国は、最初から布教戦略を放棄したとされていますが、それは彼らがそのような意思を全く持たなかったことを示すものではありません。アジアをはじめ世界の各地で彼らは、武力征服と一体化した布教活動を活発に展開していました。それを日本でやらなかったのは、やりたくてもできなかったとみなすことが適切な解釈だと思います。オランダ・イギリスは、日本が軍事大国であるとの認識をしっかり持っていたからでした。たとえば一六二一年、平戸オランダ商館長から東インド政庁への書簡には次のようにあります。

「日本の皇帝は、マカッサルの王とは異なり、彼の領土内における外国人の暴力を決して許しはしない。マカッサルの王は外国人の暴力を抑止する力をもたない。しかし日本の皇帝は力において欠けるものはない」（『セーリス日本渡航記』新異国叢書書6、雄松堂）

マカッサルというのは、インドネシアにある王国のことです。

この国の王は外国人を抑止できないが、日本の皇帝には力がある、と記しています。インドネシアの小国は簡単に捻りつぶすことができるけれども、日本はとても無理だということを意味しています。だからオランダは、日本の皇帝の意思を損ねないように、武力的な動きもキリスト教の布教も自制したのでした。

この後、徳川政権による布教の全面禁止、布教にこだわるスペイン・ポルトガルとの断交へといたります。強大な両国の勢力を日本から追放することができたのは、これまでの検討から明らかなように、両国と対抗可能な軍事力を当時の日本が有していたからでした。それをより万全なものとするために、幕府は全国的な沿岸防備体制を確立させます（山本博文『鎖国と海禁の時代』校倉書房、一九九五年）。これは個別大名領の軍事態勢から、全国的国土防衛体制への大きな転換を示すもので、軍事力の国家的編成が完成したと評価できます。それを背景に、長崎への貿易集中と幕府管理がおこなわれることになります。つまり単純に長崎へ貿易を集中し管理を強めたというのではなく、このような強大な軍事力が背景にあったからこそ、それが可能になったのだという点を強調しておきたいと思います。東南アジアはそれをできなかったのでヨーロッパ列強に交易の主導権を握られてしまったり、あるいは征服されてしまったといえるのではないでしょうか。そこが日本との大きな違いになってくるのだと思います。

日本の戦国時代は、軍事力を巨大に蓄積した時代でした。秀吉・家康の統一政権は軍事大国としての日本を確立したといえます。なぜ、秀吉や家康が西洋列強から畏敬をこめて「皇帝」と呼ばれていたのか。そして、なぜ日本が戦国時代末期から「帝国」といわれるようになったのか。そこには、こうした日本の実力的根拠が存在すると思われます。

さてそこで、こうした見方を学術的な論争点として提起したいがために、あえて次のような言い方をしておきたいと思います。

「日本に戦国時代が存在したからこそ、西洋列強からの侵略と植民地化を防衛できた」

こうした解釈に妥当性があるのか、それともないのか。ぜひ議論の俎上に乗せていただければと思います。そうした論議を深めることによって、前近代における日本の国際関係、および国家というものがもつ役割について、新たな理解ができるようになるのではないかと期待をしております。

〔番外の論〕

最後に「番外の論」として、少し付言しておきます。数年前に小島道裕さんが『信長とは何か』（講談社選書、二〇〇六年）という本を出版されましたが、その帯のキャッチコピーに、「天下統一は必要だったか？」と書いてありました。それで関心をもってこの本を拝見したのですが、そのなかに次の文章がありました。

「（前略）武士が階級的に結集して中央政権を作るのではなく、武士が在地に残ったまま、それぞれの地域がそのまま成熟していく、という道もおそらくありえたと思われる。（中略）そしてそのように社会と地域が成熟していった場合、政治的な統合はもっと緩やかなものでよかったはずである。各地の

大名と家臣の領主たちが、あるいは国人一揆の共和国が、あるいは本願寺領国が、それぞれ並存しつつ、連邦的な在り方で平和裡に共存する、そのような体制が、信長の戦争がなければ出現していた可能性も十分にあったと思われるのである」

小島さんは戦国期の在地権力のあり方から、信長的・秀吉的・家康的統一権力とは異なる権力のあり方、つまり連邦的共存を展望したいのだなあと受けとめました。確かにそうした考え方はありえるのだろうと思います。ただし、今回紹介したような植民地化の危機という問題から歴史を捉え直した場合、異なる見方も当然可能だろうなと思っております。

もしその後の歴史が小島さんが想定されるように、分権的な緩やかな連邦国家であったとしたら、権力の戦国期的分散状況が継続し、統一的国家意思の形成には困難が伴ったのではないでしょうか。だとすれば、そこにヨーロッパ列強の宗教勢力や政治勢力がつけこみ、日本国家の分断と征服を試みる可能性は相変わらず存在したことになるのだと思います。先に紹介したように、こうした状態は秀吉期までは確実に存在していましたし、家康期でもスペインは布教をテコにした日本支配をあきらめてはいませんでした。

こうしたことを想定すると、私は、小島さんの願望されるような緩やかな連邦制にならなかったことが日本の歴史にとって幸いだったといえるかもしれない、と考えてしまいます。つまり、戦国期における国家権力の分散状況を信長・秀吉・家康の三代で克服できたからこそ、日本は西洋列強の植民地にならなくてすんだのではないか、ということです。

こうした歴史の論じ方は、どちらが正しいか、ということではないのだと思います。どのような歴史像を構築しようとするか、どのような視点から歴史をみるかによって、歴史は万華鏡のように揺れて変貌します。解釈は固定的でない方がいいでしょう。歴史に対しては多様な解釈が可能だからです。むしろ、異なる複数の解釈があることが学問としては健全なのかもしれません。

拙著の『開国への道』では、従来の歴史学ではあまり関心をもたれていなかった問題を取り上げただけではなく、よく知られた事例についても従来とは異なる解釈を積極的に提示してみました。もちろん異論が出てくることを想定していますし、そうあってほしいとも考えています。なぜなら、異なる解釈をぶつけあうことこそが歴史の解釈を豊かにするからです。同じ対象、同じ史料であっても異なる解釈の可能性を追究すること、そこに学問の可能性が存在すると考えているからです。タブーを作ることなく、またレッテルを貼ることなく、いろいろな問題を学術的に議論する雰囲気がこの学界にあればいいなと考えて、今回はあえてこのような報告をさせていただきました。

[追記]

本報告の徳川政権期の問題については、次の論文で詳論しました。ご参照いただければ幸いです。

「スペインの対日戦略と家康・政宗の外交」『国史談話会雑誌』東北大学文学部日本史研究室、二〇一〇年

「慶長遣欧使節と徳川の外交」『仙台市史特別篇　慶長遣欧使節』二〇一〇年